

それでは今日は聖餐式についてお分ちしていきたいと思います。聖餐論という神学の論争もございませぬけれども、私たちは聖書から聖餐式について教えられている部分。イエス・キリストがそれを制定されたわけです。教会の伝統も様々ありますし、教会の伝統的な聖餐論という様々な説もございませぬが、聖書から私たちは正しく聖餐式を捉えて、そしてこれを大事にしていきたいと思っております。宗教改革者のマルティン・ルターという人が「**聖餐から遠ざかっている者は、キリスト者ではない。**」ということをおっしゃるので、先ずその言葉を重く受け止めたと思います。聖餐から遠ざかっている者は、もうクリスチャンではないと、それくらいマルティン・ルターは聖餐式というものを重んじたわけです。で、実際に聖餐式は教会が必ずやらなければならないことでもあります。で、勿論これはクリスチャン個人としてもやらなければならないことだと、今日はお話を進めていきたいと思っております。というのは、それはイエス・キリストが制定され、イエス・キリストが聖書において命じられていることだからです。**第1コリント 11：23～24**を今あらためて開いて頂き、確認をして頂きたいと思っております。聖餐式の制定文としてよく引用される有名な箇所です。『²³私は主から受けたことを、あなたがたに伝えたのです。すなわち、主イエスは、渡される夜、パンを取り、²⁴感謝をささげて後、それを裂き、こう言われました。「これはあなたがたのための、わたしのからだです。わたしを覚えて、これを行いなさい。」』**25節**にも続きとして『²⁵夕食の後、杯をも同じようにして言われました。「この杯は、わたしの血による新しい契約です。これを飲むたびに、わたしを覚えて、これを行いなさい。」』と。『これを行いなさい。』と命令形でありますので、私たちは、イエスを主とする以上はこの命令に聞き従わなければいけません。これはもう教会が発足してからの、二千年来の伝統となっています。で、これは、何故クリスチャンは日曜日毎に教会に集まるのか、その目的についてもこの聖餐式が鍵となるということも覚えて頂きたいと思っております。単純にクリスチャンだから日曜日に教会に行って礼拝をささげるのは義務だから。まあ“礼拝厳守”というその一言で片付けてしまうという人もあるかもしれませんが、あるいは教会に行くのは聖書のメッセージを聴くためであると。勿論教会に行くのは礼拝をささげるためだと言うのが正論なんですけれども、その通りなんです。ただ礼拝というのは一人でも個人でも出来るわけです。何故わざわざ教会に集まって礼拝をささげるのか。この質問にも聖餐式というものが深く関わってきます。

使徒 2：41～42に今度は目を留めて頂きたいと思っております。発足当初の初代教会の様子です。『⁴¹そこで、彼のことば（すなわちペテロのことばを）を受け入れた者は、バプテスマを受けた。その日、三千人ほどが弟子に加えられた。⁴²そして、彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていた。』ペテロの説教で三千人が一挙に大挙して救われたわけですが、彼らはその日のうちにバプテスマを受けたとあります。別にバプテスマを受けるための準備期間とか、学びのレッスンというものは受けずに、その日にバプテスマを受けたわけです。で、教会が誕生したわけですが、ここに4つのことが言われています。使徒たちの教えを堅く守るということ。で、もう一つは交わりをする。そして、パンを裂く。これが聖餐式ですね。で、4つめが祈りをしていた。これが教会の4つの柱です。この4つを守り行うことが教会というところであり、この4つを守り行う限りは私たちも初代教会と同じ歩みをする事が出来るわけです。**使徒 2：46～47**も見て頂きたいと思っております。『⁴⁶そして毎日、心を一つにして宮に集まり、家でパンを裂き、喜びと真心をもって食事をともにし、⁴⁷神を賛美し、すべての民に好意を持たれた。主も毎日救われる人々を仲間に加えてくださった。』**46節**には“毎日”とあります。毎日エルサレム神殿に集まって、家でも、各家庭でもパンを裂いた。すなわち聖餐式を守ったと。で、賛美もしていたと書いて

あります。ですから必ず教会では聖餐式を守り行うのであります。で、それは宮という公的な礼拝施設においても、また家というプライベートな場所においても、公でも家庭でも、聖餐式というものは守り行われていたということです。

で、使徒 20 : 7。『週の初めの日に（これは日曜日のことです。）、私たちはパンを裂くために集まった。』聖餐式を守り行うために日曜日に集まったと。これが日曜日に教会に集まる目的です。で、それはただ単に聖餐式という儀式だけを行なうんじゃなくて、これを中心に礼拝式が行われたわけです。最初は毎日パン裂きをしていたわけですが、この時には週の初めの日、日曜日と言われてます。2章からこの20章にかけては、もう既に30年間という時間が経過しています。30年間の間に教会は、もうパンクしたわけです。おびたしい数の人たちが教会に集ってきましたから、もうエルサレム教会単立ではとてもまかなえないわけです。そこから家の集会、そしてそこが教会に発展して、あちこちに教会が枝分かれして、^{ほうほう}方方で集会がもたれるようになったわけです。ですから今までのように物理的に、物質的に、時間的に、毎日教会に集まって聖餐式を行うということが不可能になったわけです。よく考えて見て下さい。三千人の人たちが例えば、これは男の数だけで三千人ですから、女・子供を合わせたら相当の数、一万人位いても不思議ではありません。毎日教会に集まって、毎日聖餐式を守る。それは大変な経費も手間も掛かります。物理的には継続する上では厳しいものがあるわけです。

で、20章の時点では今読んだ7節の後を見て頂くと、『そのときパウロは、翌日出発することにしていたので、人々と語り合い、夜中まで語り続けた』と。日曜日というのは、別にこの当時は休日ではありませんでしたから、普通の労働日だったわけです。ユダヤ人にとっては安息日というのは、金曜日の日没から土曜日の日没まででありまして、その間は労働をしなかったわけですが、日曜日は平日と同じでありましたので、普通に昼間働いたわけです。で、日曜日に集まるとしたら、仕事が終わってから、夕方から集会をしたわけです。で、後に日曜日がコンスタンティヌスによって休日とされましたので、公休日となりましたからクリスチャンたちは日曜日に教会に朝から集まるようになったわけです。それまでは夕拝だったわけです。少なくとも夜にパンを裂いていたわけです。もちろん教会という専用の施設も当時はありませんでしたから、家が教会となっていたわけです。エルサレム教会も最初は家だったわけです。マルコのお母さんのマリヤの家、それが最期の晩餐の舞台でもありましたし、そこで120名ものキリストの弟子たちが集まって祈り会をしていたわけです。その祈り会は、イエスが約束した聖霊のバプテスマを受けるために、ずっと10日間缶詰状態で祈っていたわけです。そこに聖霊が下って、ペンテコステの日にそれぞれが神を賛美しながら、ペンテコステのお祭りに集まったいろんな国々の人たちに福音を宣べ伝え、ペテロが代表して説教して男性だけで三千人が大挙して救われたわけです。女・子供も含めたら相当数だったということは先程触れました。彼らを全部収容できるような施設は当時は無かったわけです。ですからエルサレム神殿に行ったり、それぞれの家々で集まったりして集会をしていたわけです。規模が小さければ毎日でも頻繁に行なうことができましたが、毎週でも勿論一度に会することは出来たでしょうけれども、大きくなればなるほど中々物理的にもその頻度を保っていくのは難しくなっていくと思われれます。実際にイエス・キリストは聖餐式を制定する際には、頻度までは命じておりません。ただ一年に一回位すれば良いとか、たまに思い出したようにやれば良い、というようなニュアンスはそこには一切含まれませんので、出来る限り、事ある^{たび}度に、機会がある度に、これはそれなりの頻度を保つようにということがその制定文からは窺^{うかが}い知れます。

で、私たちは集まる度に、特に日曜日、教会に集う度に聖餐式を意識するという事。もちろん聖餐式だけを受けに来るわけではありませんが、キリストを覚えるというのが聖餐式の趣旨でありますので、それを続けるためにイエスがわざわざ聖餐式というセレモニーを制定して下さいましたから、これを私たちは決して軽視はいたしません。

で、聖餐式の起源については、もう皆さんも知っての通り、それは最期の晩餐と言われましたが、先程読んだ**第1コリント11：23～24**にも、『**主イエスは、渡される夜**』と言われてます。で、他にも福音書の中に、**マタイの福音書**であれば**26章の26～30節**。**マルコの福音書**では**14章の22～25節**。**ルカの福音書**であれば**22章の19～20節**です。そこに最期の晩餐の席でイエス・キリストが聖餐式を制定されたという記述が見られます。でも、その聖餐式の起源という最期の晩餐は、そもそも“過ぎ越しのお祭り”の食事だったわけです。ですからルーツは、“過ぎ越しのお祭り”にまで遡^{さかのぼ}るわけです。英語で言いますと”pass over”（パスオーバー）です。“過ぎ越しの祭り”それはイスラエルがエジプトから救出されたことを記念するお祭りで、その際には過ぎ越しの子羊がほふられて、そして種無しパンとぶどう酒が飲食されたわけです。イエス・キリストは、そのユダヤ人の伝統となっていた過ぎ越しの食事を弟子たちと共にしたわけです。これは年に一回の特別な食事です。日本人の感覚で言うと、それはまさに“おせち料理”のような特別な食事です。というのは、過ぎ越しの祭りはイスラエルの新年をお祝いする時期でもあったからです。で、それは国家としての建国を記念する喜ばしいフェスティバルでもあったわけです。そこからイスラエルが誕生したわけです。で、イエスは、その“過ぎ越しの食事”を弟子たちと最期の晩餐として、翌日に、過ぎ越しのお祭りのその日に、過ぎ越しの子羊として十字架で死なれたわけです。まさにイエスの十字架の死が、過ぎ越しのお祭りの成就となったわけです。かつて過ぎ越しの子羊がほふられた千五百年前のモーセの時代、その時子羊の血がそれぞれの家の門柱の左右二箇所、そして鴨居（上のところ）に一箇所、そして家の玄関の足元に鉢に血が入れられて、外から見ると玄関に血が4箇所塗られているわけです。上下左右4箇所。それを線で結ぶと血塗られた十字架が浮かび上がるようなサインがそこに見られたわけです。それを見た裁きをもたらず“死の御使い”はそこを過ぎ越して行ったわけです。で、その家の初子は死なずに、罰を受けずに、裁きを受けずに済んだわけです。でもその血のサインの無い家は、“死の御使い”が入って、初子の命を奪っていったわけです。それはパロの初子も例外ではありませんでした。で、そのことが切っ掛けとなって、出エジプトが出来たわけです。で、イエスはまさにその“過ぎ越しの子羊”となって、文字通り十字架に掛かって、血を流されたわけです。そして最後の晩餐、過ぎ越しの食事においてご自分がほふられて、体が文字通り裂かれるわけですが、その裂かれたパンがイエスの体を表すと。そして、そこで大量に流される血潮、それが杯であると。そのように象徴として目に見える形でイエス・キリストをセレモニーとして覚えていくことが出来るように、制定されたわけです。誰でもイエスを信じる者は、すなわち自分の心にイエスの血塗られた十字架を塗り付ける者は、その者は神の裁き^{まぬが}を免れるわけです。神の裁きは過ぎ越されていきます。で、そのことを感謝して私たちは過ぎ越しの食事を、聖餐式として継続して守り行っていくことが出来るわけです。ですからこの過ぎ越しの食事のホスト（接待役の男主人）がイエスであったように、最期の晩餐のホストがイエスであったように、今日も聖餐式のホストはイエス・キリストご自身であります。決して誤解してはいけないことですが、これは牧師が特別に行なう専売特許ではありません。牧師でないと聖餐式が行えないと思ったら、大間違いです。多くの教会では、按手を受けた正教師という牧師の免許を持っている聖職者でなければ、教役者でなければ聖餐式を執り行うことは出来ないと定めております。でもそんなことは聖書には一つも書いてありません。聖餐式のホストは、牧師ではなくて主イエス・キリストご自身です。ですから、これは牧師がホストとなつて行なう牧師の専売特許ではないということです。

で、もう一つ聖餐式の大切なキーワードとして、“新しい契約”という言葉があります。“新しい契約”。古い契約は、もちろん旧約聖書です。古い契約によれば、罪の赦しは血が流されることによって行われますから、必ず生贄^{いけにえ}の動物を必要とします。それを神殿に持って行って、祭司によってほふってもらって、そして旧約のレビ記に記されている一定の儀式を経て、晴れて罪の赦しを確認できるというものでした。でも、実際にはそのような羊や山羊といった動物の血では、完全に罪を拭い去ることは出来ないわけです。

でも、新しい契約では、その古い契約では出来なかったことをイエス・キリストご自身が生贄となられたので、それが実現されたわけです。今までの古い契約は、そのイエス・キリストのなされることの影であった、型であった。雛形というものです。本体はイエス・キリストでありますので、そのイエス・キリストがこの世に来られて、そして世の罪を取り除く神の子羊となって、十字架の上で贖いの死を成し遂げられましたので、もう新しい契約が古い契約に取って代わったわけです。そのことを覚えるようにとイエスは制定文の中でおっしゃってます。「これは新しい契約である」と。つまりもう生贄の動物を神殿に携えてきて、祭司にほふってもらう必要はないと。わたし自らが生贄となってほふられ、わたし自らが大祭司となって自分の血を携えて、地上の神殿ではなくて、天の神殿に携え入れて、もう罪の贖いは永遠に成し遂げられたと。この辺りのことはヘブル書に詳しく展開されております。古い契約から新しい契約に移行した、取って代わられた、さらに優れた希望という形でイエス・キリストが生贄となり、また大祭司となつてすべて成し遂げられたということが、ヘブル書には詳しく書かれております。ですから、ここでは行いによらずに信じるだけで罪の赦しが得られるということ。むしろその行いは、私たちが何も出来ないわけですから、イエス・キリストがすべてやって下さったということを知るだけで救われるという新しい契約を覚える時でもあります。そしてヨハネの福音書の13章の最期の晩餐の席でイエスが行われたことも見て頂きたいと思います。1節を見て下さい。『さて、過越の祭りの前に、この世を去って父のみもとに行くべき自分の時が来たことを知られたので、世にいる自分のものを愛されたイエスは、その愛を残るところなく示された。』単に儀式を行っただけじゃなくて、イエスはこの場で“愛を残るところなく示された”とあります。聖餐式と言っても、食事もしましたから晩餐会でもあったわけです。で、それを“愛餐”とも言います。“love feast”と言いますけれども、この“愛餐”という言葉はユダの手紙にも使われていて、原語は“agape”（アガペー）と言います。一言で“アガペー”と言えば、神の愛を表す言葉として皆さんもよく知っていると思いますが、それが“愛餐”。それはポットラック形式で行われたもので、イエスの注がれた愛を共に分かち合う重要な教会の行事となっていくわけです。ただ単に空腹を満たすための、あるいは親睦を深めるための食事会ではありません。イエスの愛を共に分かち合う時です。ご飯を一緒に食べながらです。食事を共にするということは、一体化するという象徴的な意味があります。イエスは弟子たちと一緒に最期の晩餐という食事をされたわけです。過ぎ越しの食事を一緒にされたわけです。ただの飲み食いとは区別されるべきものです。聖餐という言葉もそれを表しています。聖い“晩餐の餐”と書いて聖餐と言います。聖さというのは、聖書ではただ単に道徳的に倫理的に聖いという意味だけではなくて、その意味の原意は『区別する。分ける』ということです。普通の晩餐とは違う。区別されるべき特別な食事であると。ですから私たちは聖餐式を通してイエス・キリストがホストでありますから、一緒にイエスと御飯を食べて、イエスとの交わりを、豊かなその時間を過ごすわけです。で、同時に同じ弟子たち、同じ兄弟姉妹とのその神の家族との交わりも同時に持つことが出来ます。

聖餐式というのは一つの名称でありますけれども、聖書の中では“パン裂き”という言葉がよく使われます。その他にも聖書の中には“主の晩餐”という言葉も見られます。第1コリント11:20（しかし、そういうわけで、あなたがたはいっしょに集まっても、それは主の晩餐を食べるためではありません。）また、第1コリント10:21（あなたがたが主の杯を飲んだうえ、さらに悪霊の杯を飲むことは、できないことです。主の食卓にあずかったうえ、さらに悪霊の食卓にあずかることはできないことです。）では“主の食卓”。そして“主の杯”という言葉も使われてます。またこれはギリシャ語から来ている言葉ですが、“koinonia”（コイノニア）という言葉です。これは第1コリント10:16（私たちが祝福する祝福の杯は、キリストの血にあずかることではありませんか。私たちの裂くパンは、キリストのからだにあずかることではありませんか。）に使われている言葉です。“あずかる”という言葉が“コイノニア”です。これも聖餐式に使われる言葉です。聖餐式は“コイノニア”である。あずかることである。で、この“あずかる”という言葉

は他にも“交わる”というふうにも訳せます。英語では“fellowship”です。ですから、この教会にもマラナサ・グレイス・フェローシップという名称が使われておりますが、この“フェローシップ”はギリシャ語で言えば“コイノニア”、『あずかる』ということ。それは聖餐式にあずかるということでもあるわけです。

他にも原語をそのまま踏襲した聖餐式の用語として、呼び名として、“eucharisteo”（ユーカリス）という言葉があります。これは**マタイ 26 : 27**（また杯を取り、感謝をささげて後、こう言って彼らにお与えになった。「みな、この杯から飲みなさい。」）の聖餐式の制定文から取られています。“感謝をささげた”というところが、ギリシャ語の“ユーカリス”という言葉です。厳密には“ユーカリストータス”という動詞ですが、名詞では“ユーカリス”と。これをそのまま専門用語として使用しています。聖餐式のことを“ユーカリスト”と言うこともありますから、心に留めておいて下さい。

また他にも『スナクシス』という、これもギリシャ語“sunerchomai”から取られた聖餐式の呼び名です。この“スナクシス”という言葉は、主の晩餐を守るために集まるということをするんですが、その“集まる”という言葉から来ています。ですから、集まることも聖餐式の中心的な事由ということ。何のために集まるのか。それは聖餐式を守るために集まるんですよということですから、“スナクシス”というふうにも呼んだりします。

他にもこれは“^{おくぎ}奥義である”という言い方がありまして、“おうぎ”と日本語でよく読むんですが、新改訳では“おくぎ”と呼んでいるもの。それはギリシャ語では“musterion”（ムステリオン）、英語の“mystery”の語源です。“ムステリオン”とも呼ばれたりします。

あるいは、礼拝式を表すギリシャ語の“レイトゥルディア”。これも聖餐式に使われたりします。で、そのラテン語が“サクラメント”と言いますから、その“サクラメント”がカトリックでは『秘跡』と呼ばれ、プロテスタントでは『聖礼典』と呼ばれます。それも聖餐式を表す言葉です。“ミサ”という言葉も当然使われるんですが、“ミサ”というのは『解散』とか『退室する』、これから集会が終わって出て行くという、遣わされて行くというのが、その原意であります。でも、そのミサの中心は、キリストの体を頂くという聖餐式に当たるものです。カトリックでは『聖体』と言います。それを頂くことを『聖体拝領』と呼んだりもします。あるいは『ミサ聖祭』というふうにカトリックでは祝ってます。『聖体』の秘跡、プロテスタントではそれを『聖餐式』あるいは『聖晩餐』と通称しております。特にカトリックでは、皆さんも御存知の通り、儀式主義でありますので、日曜日に彼らが教会に行く目的は『ミサ聖祭』に参加すること。聖餐式に当たるものがその『ミサ聖祭』なので、それを受けに行くというのが彼らの考え方です。ですから、カトリック系のミッション・スクールでは礼拝のことを『受ける』と言います。でもプロテスタントでは、礼拝は神にささげるものですから、“受ける”とは表現しません。そういう認識の違いがあります。

で、プロテスタントの話に絞っていきたいと思いますけれども、プロテスタント内でもいろいろ聖餐式の捉え方があるということは冒頭でお話しましたが、頻度についても全然違います。例えば、英国国教会では毎週聖餐式を行います。カトリックに近い聖公会もそうですが、そういう儀式を非常に伝統として重んじるというグループがあります。その一方で全く対称的なのは、救世軍というグループです。彼らは儀式を一切行いません。で、それは聖餐式だけではなくて、バプテスマも行いません。水のバプテスマもしない。聖餐式もしない。その根拠は**黙示録 3 : 20** その言葉が救世軍の人たちの儀式を一切行わないという根拠です。これは参考までにということで聞いて下さい。その箇所は『見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところに入って、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。』と。これは物理的なことじゃなくて霊的なことなので、主は心の交わりという霊的方法をとられると。ですから目に見えるような儀式はする必要が無いと。そういう解釈です。

で、内村鑑三から始まった無教会も同じです。聖餐式は行いません。内村自身は水のバプテスマも受けましたし、聖餐式も受けているんですが、今の無教会ではそうした儀式は一切行わない、聖餐式は行わないということです。

その他のプロテスタントの主流は、大抵は月に1回というのが一般的だと思います。ちなみにクリスマスというのは“キリスト・ミサ”という言葉から来ています。ミサというのは先にお話した“ミサ聖祭”から来てますから、聖餐式を表す言葉です。ですからクリスマスはキリストの聖餐式というふうにも訳せるわけです。で、それは年に1回ではなくて、毎週聖餐式であれば行えます。そうしたら毎週クリスマスです。もちろん毎日でも行えますから、そうしたら毎日クリスマスという話になるわけです。ただ、その守り行なう頻度というのは、物理的な理由が大きいと思います。毎日行いたくても、とてもそれは物理的に難しいというケースがあるわけです。ですから頻度というよりも、これを継続して行なうということです。なるべく頻度を増やした方が望ましいということは言うまでも無いことですが、1年に1回でいいとかということではまずないわけです。

で、どうしても儀式という言葉が出てきますと、私たちは堅苦しい、重苦しい感じを印象としても持つかもしれませんし、あるいは律法主義という言葉がすぐ思い浮かべてしまうかもしれません。でも実際にはそんな神秘的な儀式とか堅苦しい儀式というのは含まれません。むしろイエス・キリストが定められた、命令されたものであり、イエスご自身も行ったことであって、それはまずは厳粛に受け止めなくてはいけないことですが、それは和やかなものだったはずで、イエスはご自身の愛を余すところなく、残すところなく注ぎ込んで下さった。これは愛の食事会でもあったわけです。愛餐会でもあったわけです。ですから何か儀式という言葉だけが独り歩きして、形骸化した、もう血も通ってないような冷たいものとか、あるいは堅苦しいものとかじゃなくて、イメージとしては厳粛に受け止めながらも、命令である以上はこれは守り行なうということが私たちの義務ではありますが、でもこれは喜んでそうしたいと。イエスの愛が注がれるという豊かな時間でもありますから、イエス・キリストと一緒に御飯を食べる。こんなに素晴らしい機会は他にないわけです。憧れの人と一緒に御飯が食べれる。最も尊敬して、最も愛する人とご飯が食べれる。ディナーが用意されているとしたら、私たちは行かないわけにはいきませんね。他の用事を置いてでも、どんなに忙しくても、例えば皇居に招かれて天皇陛下と一緒に食事をするとか、あるいは総理官邸に呼ばれて安倍首相と食事が持てるとか。皆さんが思いつくだけのこんな人と一緒に御飯が食べれたらどんなに幸せか、素敵なディナーとなるのかと。そういう対象を思い浮かべて頂ければいいと思います。結婚している方は当然自分の夫だと言うと思いますけれども、そう信じますけれども。ただ、憧れのスターとか、皆さんであれば吉永小百合と御飯と一緒に食べるとか。古すぎますかね。そういう憧れの、これ以上無いという素敵な人、それが私たちの主イエス・キリストでありますから、その方と御飯が食べれるという感覚で捉えて頂ければと思います。そこには堅苦しさとかは一切微塵も見られないと思います。

でも残念ながらカトリックなどでは特にそうなんですが、これを儀礼化してそれが結果的には形骸化してしまって、無味乾燥な機械的な形式的なものに成り下がってしまったと。で、しかもこともあろうにこれを守り行なうことによって救われる。 sacrament という秘跡を行なうことによって救いを得るというような、これも律法主義です。行為義認に歪められてしまったという歴史がありますので、それに反発した宗教改革者たちは、聖餐式をそれほど重んじなかったわけです。軽んじるとまでは言いませんけれども、カトリックでさんざん儀式主義で辟易としたわけですね。こんな無意味なこと、こんな無駄なこと、こんな意味の分からない儀式を行なうような、そこに価値を見出さないまま来てしまったという経緯がありますので、あまりこれが礼拝の中心に置かれるということがプロテスタントではなくなってきたわけです。反動がそうさせてしまったと言えらると思いますが、ちょっとだけカトリックの反動の切っ掛けとなっ

まった聖餐式のあり方について今でもそれが継続されてますので、少しだけ触れておきたいと思います。

『聖体』という言葉がキリストの体を表す言葉です。それはカトリックだけじゃなくて、正教会（ギリシャ正教会、ロシア正教会の正教会です。）といったところでは、『聖体礼儀』とか、また『聖体拝領』というような言葉で非常に荘厳な重苦しい儀式として行われているわけですが、彼らのそれぞれの捉え方というのは、プロテスタントのそれとは全く異なります。意味合いが変わるということです。かつてカトリックでは、一切キリストの血を表す杯というものは口にしませんでした。体だけ、『聖体』という言葉が表している通り、体だけを使う。それがパンということなんですが。血は、杯は、使わずに体だけ、パンだけを使ったわけです。で、そのパンというのは酵母を使わない、イースト菌を入れないパンで、見た目はウエハースのようなものです。で、“ホスチア”という呼び名が使われてます。ラテン語でその“ホスチア”という言葉は、『生贄』という意味です。生贄の供え物です。で、その言葉がまさにカトリックの聖餐式に当たる『聖体』をよく表していると思います。毎回聖餐式に生贄をもって自分たちの罪をきよめる、罪の赦しを得るという意味合いで行なうということが、カトリックで行われていた儀式です。これを行わないと、生贄をほふらないと、罪の赦しが得られないので、必ずと言っていいほど「聖餐式を定期的に受けないと罪が残ってしまう」ということで罪の赦しを得るために聖餐式、『聖体』に与る^{あずか}るように、ミサに参加するわけです。だから一週間沢山の罪を平然と公然と犯してきて、日曜日になって教会に行って『ミサ聖祭』に与れば、もうその時点で、ホスチアを口にすれば、その時点で罪がまっさらになるわけです。で、また月曜日から好き放題、やりたい放題、罪を犯して、日曜日になる度に罪を清算していくという、そういう考えに至っていくわけです。ですからイタリアのマフィアとかが好んだわけです。散々人を殺して、犯罪をやりたい放題やって、日曜日になってホスチアをもらえば、それで全部消去されるわけですから、罪悪感も拭かれるわけです。で、罪赦されたという感激・感謝をして、犯罪で儲けたお金を教会に献金するわけです。で、スポンサーとなっている以上、カトリック教会としても、バチカンとしてもマフィアの実態は無視できないわけです。そういうことが最近指摘されて、昔から問題になっていたことですが、マフィアとの手を切るということも問われているわけです。

話を戻したいと思いますけれども、イエス・キリストはカトリック教会では、必ず十字架につけられたままの状態^まで教会の高いところに掲げられています。プロテスタントでは、十字架は掲げられてもそこにはイエス・キリストは掛かっていません。というのは、もう死んで、よみがえられたからです。でもカトリックでは、何故十字架にイエスがついたままになっているのか。それはこの聖餐の、聖体のホスチアが表している通り、毎回毎回イエスは私たちの罪を負うために死ななければいけない。生贄とならなければいけないということで、そういうことが儀式の中に表されてるわけです。

東方教会の方では、逆にイースト菌を用いた発酵したパンを使います。それを“プロスフォラ”と呼んで、意味は“せんべい”です。日本語では“聖餅”^{せいひい}と言います。いろいろキリスト教の教派によっては呼び名も違いますし、意味合いも違います。ただ両者に、カトリックと正教会に共通していることは、そのパンというものが文字通りイエスの体^{へんげ}に変化すると。つまりそのパンそのものがイエスの肉体を表すじゃなくて、肉体そのものになると、生贄になると。ですから一般の信徒は聖職者じゃない以上、そのパンに触れることは許されないわけです。イエスの体に一般の信徒が、教会員が触れるなんてことは許されないわけです。触れることができるのは、司祭のみです。聖職者のみです。だから口に入れてもらうわけです。勝手に手で触ることは許されないわけです。でも、そんなことはもちろん聖書には書いてません。それについていろいろプロテスタントの中でも意見が様々であります。例えば、宗教改革者のルターは、このパンと杯・ぶどう酒をどのように捉えていたかという、^{きょうざいせつ}共在説という説をとっていました。パンとぶどう酒がそのままキリストの体と血に変わるというカトリックの説は退けました。そのカトリックの説はちなみに化体説^{けたいせつ}と言います。それはないだろうと。パンと杯がキリストの体そのものになる、それはあ

りえないことだと。あるいは血そのものになる。それは無いこと。でもパンとそのぶどう酒、そのまま実態は変わらないまでも、そのパンとぶどう酒とともにキリストの体と血が、そこにも存在するんだと。共在するという、現存するということです。ちょっとわかりづらいかもかもしれませんが、パンと杯そのものはキリストの体と血になるわけじゃないんですが、霊的な意味でキリストの体と血がそこに共にあると。

で、それに対抗するように同じ宗教改革者のツヴィングリという人は、象徴説というのをとりました。もう象徴ですから、パンと杯はあくまで象徴にすぎない。で、そのルターの共在説とツヴィングリの象徴説の丁度中間にあたる説。それは臨在説と言いますけれど、これが宗教改革者のカルヴァンがとった説です。霊的現臨説とも言います。それはカルヴァンによると、聖餐式の度に、パンと杯に与る度に、キリストの天にある体が聖霊によってその聖餐式の場に運ばれて来るんだと。

どれをとっても何か分かりづらいというか。まあ、象徴説が一番分かり易いと思うんですが、ルターのものとかカルヴァンのものというのは、いろいろ分かりづらい点もあります。ただ、カトリックの化体説は共通して退けています。『パンと杯そのものがキリストの肉体になったり血になる。そしてそれは一部の聖職者のみが取扱いの出来るもの』そういう考えは共通して退けています。敢えてこういうことを話したというのは、プロテスタントの中でもいろいろな説があって、混乱もあるし、迷いもありますし、確信が持てないという実態があるということ、それを伝えるために敢えてそういう説があるという大まかなもの、ルターの共在説。そしてツヴィングリの象徴説、ルターに対抗するようにしてただの象徴だと。その中間をとったカルヴァンの臨在説あるいは霊的現臨説と。まあ一体どれなのかという話になるわけですが、英国国教会（聖公会）ではプロテスタントとカトリックの間のようなイメージを皆さん持っていると思いますけれども、パンとぶどう酒のことを『聖体と聖血』と呼びます。カトリックと同じように“ホスチア”と呼ばれるイースト菌を使わない無発酵のパンを使います。呼び名は“ウェハー”とか“ホスト”というふうにも呼んだりします。それを聖公会の司祭が（牧師とは言いません）、信者の口の中に注ぎ込むわけです。そこがカトリックに似ています。ただローマ・カトリックでは、信徒はパンしか頂けなかったわけですが、パンと杯両方を頂く、これは“二種陪餐”^{にしゅばいさん}というふうに言います。ルターが宗教改革の時には、パンだけじゃなくて、ぶどう酒・杯にも与ることが聖書的だと言って、二種陪餐というのが今では行われるようになったわけですが、カトリックでは以前はパンだけでした。そういう歴史があるということ。で、これはこれからもプロテスタントの中でもいろんな説が存在する以上、議論は絶えないと思いますけれども、私たちは敢えてそうした説にとらわれずに、聖書から単純に捉えることを努めていきたいと思っております。

で、先にお話した通りイエス・キリストが定められた聖礼典は二つだけです。一つはバプテスマ（洗礼式）ともう一つは聖餐式と、この二つだけです。カトリックは全部で7つあると。この二つプラス五つあるというふうにして、その五つを守り行なうことによって救われるという行為義認の教えを説いてますが、これは非聖書的な教えです。でも二つの sacrament（聖礼典）。これは、クリスチャンとして必ず守り行わなければならないことだと。これによって救いを失うとか得るとかいうことは勿論ないわけですが、イエスが命じられたことを守り行なうのは、イエスの弟子としての義務であります。で、勿論それを機械的に行なうだけじゃなくて、ちゃんと意味も理解して、これを私たちは忠実に守り行っていくということが肝要であります。聖餐式の基本的な教えは、食事を中心としていますので、一体化がそこに目指す目標となっているわけです。バプテスマも同じようにキリストとの一体化が儀式の中で表現されています。ですからこの二つの聖礼典は共通して、『イエスと一つとなる』一体化するということです。扱うアイテムは違います。バプテスマはもちろん水が使われるわけです。イエス・キリストが私の、あなたの罪のためにために死なれたこと、葬られたこと、そして三日目によみがえられたこと。それを信じる私たちはイエスと共に葬られ、もう古い自分は水の中に葬られ、そして古い自分はイエスと共に十字架の上で磔殺され、そ

して葬られただけじゃなくて、三日目によみがえるということ、イエスと共に新しい命を得て新しい歩みをするということが、信仰告白でもそれを表明するんですが、それを体でも体現する、それがバプテスマであります。イエスの体験と、イエスと同じアイデンティティー（同一性）を持つということです。ですからバプテスマというのは単純に“沈める”という”baptizo”（バプティゾー）という言葉から来ていますので、イエスと一緒に沈められる。イエスと同じ色に染まるみたいなイメージでいいと思います。で、一体化するという意味は、聖餐式の中でも継続されていくわけです。バプテスマは一度限りです。何回も行なうものじゃありません。一回受ければ十分であります。でも聖餐式は継続して行われています。パンを裂いて杯を頂くという。これもキリストと一体化するという行為ですけども、食事を共にすることは、まあ私たちは御飯を食べないと生きていけないわけですから、命に与ることであります。毎回毎回イエスと共に食事をして、イエスから命を頂く、イエスと命を共有する。それを象徴的に表しているわけです。で、イエスがどれほど食事をよくされたのかということは福音書からも皆さんよく知っていると思います。罪人とか取税人、遊女とか社会からレッテルを貼られている人たち、特にパリサイ人や律法学者たちが見下して忌み嫌っているような人たちとイエスは頻りに食事をされました。それは罪人と一体化することを象徴的に意味していましたから、その律法主義者の人たちからすると、罪人と一緒に食事をするイエス・キリストは汚れていると、罪人と一体化するようなまねをしている、というふうに非難されたわけです。でも食事というのはまさに一体化を意味しています。イエスは罪人の友となられて、まさに彼らと文字通り一緒になった、私たちとも一緒になって、私たちの罪を最終的には十字架の上で負って下さったわけです。ですから罪人とイエスが一体化されたので、私たちはイエスと結びつくことができ、そしてイエスが罪を十字架の上で負って下さったので、私たちは罪赦されて、そして今度は神と和解の食事をできるような、まあそれがおせち料理ですね。まさに神と一緒に食事をするというのはおせち料理の正月の起源ですけども、本物のおせち料理は聖餐式です。神と一緒に食事をするという、そういう今度は罪赦された者として和解の食事をするという意味合いにつながっていくわけです。

で、バプテスマは、一人で受けるものですから個人との結びつきの強い性格を持っています。ただ聖餐式のセレモニーとして性格は、一人で受けるというよりも、周りの兄弟姉妹と一緒に、弟子たちも一緒に過ぎ越しの食事に与ったように、公共性を持っているわけです。一対一というよりもイエスがホストでありますけれども、大勢の家族とともに仲間と一緒に食事をする、というのが聖餐式の儀式としての性格にあります。バプテスマは個人的なもの。そして聖餐式は、家族的なものと言っていいと思います。一つのパンに皆んなが与るわけです。一つの杯に皆んなで与るわけです。一つのパンを裂いて皆んなで廻して食べたんです。あるいは一つの杯を皆んなで廻して飲んだわけです。同じ鍋をつつくようなイメージを持って頂いて構わないと思います。これは神の家族の愛餐会でもあったわけです。コイノニアという交わりをする時でもあったわけです。これによって、聖餐式によって、バラバラだった家族が一つになる。ですから一緒に家族が御飯を食べるということは、家族の絆を深め保つためには欠かせないものです。一緒に御飯を食べなくなったら、家族は皆んなバラバラであります。だから一般の家庭でも家族が皆んなで一緒に集まって御飯を食べることは大事なことだというふうにみなされるわけです。教会も同じです。別に教会に行かなくてもいいとか、それは一緒に御飯を食べない、というバラバラの家族を意味しています。で、一緒に御飯を食べる中でいろいろなことを語り合い、そしてそこで違いを超えて、また交わりを深めながら一致に結びついていくわけです。初代教会も毎日行なったのは、いきなり教会が生まれてバラバラだったわけです。ペンテコステの祭りには、エルサレムだけじゃなくて、周辺の地方や諸外国からも来たわけです。ヨーロッパとかアフリカとかアジア大陸から、方方からユダヤ教に改宗した異邦人たちがペンテコステのお祭りに集まっていたから、彼らはもうバラバラだったわけです。民族も違うわけです。言語も違うわけです。ですから、毎日集まって一緒に御飯を食べてコミュニケーションをする。『コイノニア』

という言葉は、英語の“コミュニケーション”の語源でもあります。“コミュニティー”の語源でもあります。あるいは“コミュニオン”という共同体の語源、これが『コイノニア』フェローシップでありますから、違いが大きければ大きいほど、これを頻度を持って行なう必要があるということです。バラバラであればこそ、よく集まって御飯を食べる必要があるということです。そういう目的もあって、聖餐式はそれぞれがバラバラに、個別にやるものではないということです。皆んなで集まって、与ることに意義があるということです。

で、弟子たち、12弟子たちにとっては、最期の晩餐と呼ばれていたものですが、厳密には最期ではありません。というのはイエスは今も生きているからです。ヘブル13:8によれば、『イエスはきのうも今日も、いつまでも同じ』だと言われているので、同じイエス・キリストが今日も生きていて聖餐式のホストをされます。共在説とか霊的現臨説（臨在説）というよりも、イエスがホストとしてまるで二千年前と同じような状況で、目に見えないけれどもイエスはここにおいて、ホストになってパンと杯という実際の象徴物に過ぎないものですが、それを使ってイエスは今も聖餐式を執り行われるということです。それが聖書的な理解だと私は考えております。ですから、パンそのものはキリストの体を象徴し、杯はキリストの血潮を象徴しますが、でもそれを手渡しているのはイエス・キリストであります。で、パンと杯そのものが罪をきよめるわけじゃありません。罪をきよめ赦すのは、イエスの十字架の贖いの死だけであって、儀式が罪をどうこうするわけじゃありません。ただ目的は、イエスを覚えて、イエスのなされたこと一つ一つを私たちは忘れやすい者ですから、覚えるように召されているわけです。そしてさらなるイエスとの結びつきを深めていく。食事を一緒にすることによって。そしてお互いの結びつき、交わりも強固なものにしていくわけです。そうやって教会は健全に営まれていくわけです。

で、プロテスタントの教会では残念ながら、この聖餐式の意義というものが見落とされて、あまり重視されてこなかったという歴史があります。何のために集まるのか。本当は“教会”というのは、ギリシャ語では“エクレシア”というのが使われていますが、それはまさに、「世から召し出されて集められた集団」を表す言葉です。召された者の、呼び出された者の群れ・共同体。それが“エクレシア”です。特にわざわざ世の中から、家から、職場から、近隣社会・地域から呼び出されて教会に集まるのは何のためか。それは突き詰めていくと、聖餐式を守り行なうためです。イエスがホストとなって呼んで下さっているわけです。「ここに来なさい。一緒に御飯を食べよう」と。家族が全員呼ばれているわけです。ですから残念なことにプロテスタントの教会に通っている人でも、何のために毎週礼拝に行っているのか、問われても答えられない人がいるわけです。「クリスチャンですから」とか、「説教を聴くため」とか。「献金もあるわけですから、教会の義務として奉仕もありますから、自分が行かないわけにはいかない。当番があるから、だから行ってるんです。奉仕があるから、だから行ってるんです。説教を聴かなきゃいけないから。」でもそれは大抵の場合、自分のためですね。何か為になる話が聴けるかもしれないから。教会の維持運営のためには行かないわけにはいかないから。それが理由じゃないわけです。本当はイエス・キリストが食卓に招いて下さっている。ですから、これほどの祝福はないと、特権はないということで、忙しかろうともちろん暇だろうと関係なく、イエスが呼んで下さっている食事会ですから、どんなに遠くたって関係ないわけです。どんなに疲れていても関係ないわけです。愛する人と一緒に御飯を食べるなんてことになったら、皆さんはもういくらでも時間をやりくりして、疲れていようとなんであろうと、どんなことをしてでも、何としてでも、その愛する人との食事、これをすっぽかすことも勿論ないですし、心からそれを期待しながら、ワクワクしながら、これ以上ない幸福感をそこに味わうわけですので、最優先して最重要事項として、それを中心に営むわけです。仕事に行っても、その愛する人との食事を持つためにどのようにやり繰りしたらいいのか。どう時間割を調整したらいいのか。全然中心が違うわけです。生活の中心、営み方はこの食事会を軸にしていく、中心にしていくわけです。それによって一週間のスケジュールも決まってき

ますし、過ごし方も違ってきます。意味合いも違ってきます。仕事を頑張って、一生懸命汗水垂らして、そしてちゃんとノルマをこなして果たす。その目的は早く仕事を終えて愛する人に会って一緒に御飯を食べるためです。金を稼ぐためじゃないです。職場で良く思われたりとか、単純に義務を行なうというそういう目的ではなくて、むしろそうやって一生懸命頑張れるのは、愛する人が待っているからです。愛する人との時間がもう待ち遠しいからです。そのために一生懸命働くわけです。

で、聖餐式は教会の中では付属的な集会和か一部の儀式にすぎないものじゃないということを皆さんには伝わったかと思います。逆に礼拝の中心でなければならぬほど重要なものです。プロテスタントでは、どちらかというと言教が中心ということなんですが、言教だけで十分という思いが多くプロテスタントの信者にはあろうかと思いますが。聖餐式はイメージ的には礼拝の付属と。そういう付録のような感覚を持っているかもしれません。黙示録 3 : 20 は先程開いて読みましたけれども、そこではラオデキヤの教会からイエス・キリストが閉め出されてしまっているの、教会の扉をイエスが叩いていると。実に皮肉な姿です。教会の主が教会から閉め出されて、本当だったらそんなことをされたらドアを蹴破ってイエスは中に入る権利も権威もあるわけです。でもそれをせずに紳士的にドアをノックしているわけです。中から開けてもらうのを待っているわけです。で、入れてもらったら何がしたいかという、一緒に食事がしたいと。そうイエスはおっしゃってるわけです。食事をする、一体化する、交わりをする、和解をしたい。でもイエスが実際にそうやって閉め出されてしまっている教会があるわけです。つまりイエスとの一体感が希薄な教会が多いわけです。あるいはそういった教会生活をしている人たちが多いわけです。教会に一致がない、バラバラなのは何故か。聖餐式が中心でない、軽視されているからです。ただの付随した、付属の、付録の儀式と成り下がっているから。だからバラバラといった雰囲気は否めないわけです。生き生きとした交わりがその教会にない。なぜか。聖餐式が無意味なものとして、ほとんど価値のないものとして、ただ儀式だけで行なわれているから。中には半年に一回とか、一年に一回しか行なわない教会もあるわけです。全く聖餐式をしない教会も勿論存在します。愛する者との団欒。それが聖餐式です。そこには笑顔も、笑い声も、楽しみ喜びが満ち溢れるわけです。教会とはそういうところ。礼拝とはそういう雰囲気で行なわれるものです。それが教会活動です。当番でやりたくもないことを渋々やらされるとか、厳粛な雰囲気は勿論教会の中にも存在しますが、でも何か冷たい、堅苦しい、重苦しい雰囲気、「賑やかな団欒、温かみのあるような豊かな交わり」、そういうものがほとんど感じられないという、そういう雰囲気が全くないという教会もあるわけです。ただプログラム通りこなして、時間が来たら終わり。「さよなら、また来週。」それで解散という、そういった雰囲気の教会もいっぱいあります。ルカ 24 章のイエスが復活された時の故事に、エマオの途上で二人の弟子が、これはクレオパ夫妻と思われま。その途上で復活のイエスとは知らずに会話を交わしながら、過ぎ越しのお祭りの日にナザレのイエスという人が十字架に掛かって死んでしまったという、その悲劇的な話を話題として道すがらするわけです。最初は、それが復活のイエスとは全然気付かなかったんです。で、ルカ 24 : 17 (イエスは彼らに言われた。「歩きながらふたりで話し合っているその話は、何のことですか。」すると、ふたりは暗い顔つきになって、立ち止まった。)のところに“暗い顔つき”をしていたというのが一つ挙げられています。教会に来て、暗い顔つきをしている人がいます。それは、エマオの途上に向かうクレオパ夫妻と全く同じで、そこにイエスがいるとは気づいていないわけです。もし目の前にイエスがいるということがハッキリしているならば、誰一人として暗い顔つきで教会に来るとか、教会の中に居座れるということはまずありえないことです。ですから、教会に来たらチョクチョク鏡でチェックして下さい。自分はどんな顔をしているか。暗い顔つきをしていたら、あなたは全然イエスが見えていない状態にあるということです。もうここにはイエス様はいないという、そういったことをあなたは顔で表しているわけです。でも、その中で二人はそれがイエスとは分からずに、その人から、復活のイエスからバイブルスタディーを聴くわけです。聖書の教えを聴くわけです。

で、その内にだんだんと心が燃えてきたわけです。もっと知りたい。もっとこの人とトコトン話をしたい。もっと深く交わりたい。一緒に御飯が食べたい。「どこにお泊りですか。できたらご一緒に」ということを言うわけです。それがルカ 24 : 30~31 に書かれています。『³⁰彼らとともに食卓に着かれると、イエスはパンを取って祝福し、裂いて彼らに渡された。³¹それで、彼らの目が開かれ、イエスだとわかった。するとイエスは、彼らには見えなくなった。』³⁵節に『彼らも、道であったいろいろなことや、パンを裂かれたときにイエスだとわかった次第を話した。』パンを裂いた時イエスだと分かった。聖餐式です。聖餐式において特にイエス・キリストの臨在がハッキリと分かる瞬間が来るわけです。これは復活後の最初の食事ということになります。最期の晩餐、過ぎ越しの食事が最期でしたが、ここでは復活後の最初の食事をされます。少し前に遡^{たど}ってルカ 24 : 13 を見て頂くと、その日というのは“ちょうどこの日”。“ちょうどこの日”というのは、ルカ 24 : 1 の“週の初めの日”です。日曜日に復活の主は、クレオパ夫妻と聖餐式をしたわけです。御飯を食べたわけです。具体的には夕方ですから『夕拝』ということ。それが私たちが日曜日集まることの目的であり、意義であります。日曜日にイエスが復活され、日曜日にイエスが最初の食事をされた。それが聖餐式そのものだったわけです。これを記念して、日曜日に集まって、聖餐式というものを、物理的に儀式として毎週毎週行なうかは別としても、少なくともその意味というものを携えて、何のために教会に来るのか、ここに呼ばれているということを考えてやって来るわけです。暗い顔つきではとても来られません。却^{かえ}って失礼です。どうして暗い顔つきで来れますか。あなたのために、体を裂いて、血を流して、死んで下さった方が、あなたをこれ以上ないという愛をもって愛し抜いて下さった方、その愛する方とのディナーをこれから一緒にするのに、どうして暗い顔つきで来れますかということ。『だって私はこういったことがあったんですから、仕方がないんです。』どの程度のことですか。それはあなたが、裸にされて、鞭打たれて、辱^{はずかし}められて、暴行を受けて、公開処刑されるほどの事なんですか。それで暗い顔つきになってるんですか。もしあなたが暗い顔つきでイエスとのディナーを一緒にするという権利があるとすれば、それはイエス以上の辱めをあなたが受けた時です。イエス以上の苦しみをあなたが受けた時、その時あなたは初めて暗い顔つきで来ても良いと認めてもらえると思います。でもそうでない限りは、絶対にそんな顔つきをはいけません。作り笑顔をする必要はありません。でも、覚えて頂きたいと思います。忘れてるから暗い顔つきになるんです。

聖餐式の制定文をもう一度振り返って見たいと思うので、第 1 コリント 11 : 23~26 節をお読みします。『²³私は主から受けたことを、あなたがたに伝えたのです。すなわち、主イエスは、渡される夜、パンを取り、²⁴感謝をささげて後、それを裂き、こう言われました。「これはあなたがたのための、わたしのからだです。わたしを覚えて、これを行いなさい。」²⁵夕食の後、杯をも同じようにして言われました。「この杯は、わたしの血による新しい契約です。これを飲むたびに、わたしを覚えて、これを行いなさい。²⁶ですから、あなたがたは、このパンを食べ、この杯を飲むたびに、主が来られるまで、主の死を告げ知らせるのです。』今読んだところでは、イエスを覚えるということの中に、過去を振り返るように、すなわちイエスがあなたのために何をして下さったのか。そして 26 節の終わりのところに、『主が来られるまで、主の死を告げ知らせるのです。』これは未来を見据えているということです。イエス・キリストは再び戻って来られます。クリスチャンのために、花嫁のために、私たちをこの地上から引き上げて下さる。花嫁泥棒のようにさらって下さる。それが携挙です。その日まで、その日を見据えながら、聖餐式を守り行なっていく。同時に続きを見て下さい。27~28 節『²⁷したがって、もし、ふさわしくないままでパンを食べ、主の杯を飲む者があれば、主のからだに血に対して罪を犯すことになります。²⁸ですから、ひとりひとりが自分を吟味して、そのうえでパンを食べ、杯を飲みなさい。』で、31~32 節『³¹しかし、もし私たちが自分をさばくなら、さばかれることはありません。³²しかし、私たちがさばかれるのは、主によって懲らしめられるのであって、それは、私たちが、この世とともに罪に定められることのないためです。』今読ん

だ箇所は、現在を吟味するということです。ですから聖餐式の中には過去と未来と現在。過去を振り返りながら主イエス・キリストが二千年前に私たちのために何をして下さったのか。忘れようのない素晴らしい歴史的な出来事でありましたが、でも残念なことに、情けないことに私たちはこれを忘れるんです。忘れて暗い顔つきをするわけです。イエスは死んだだけじゃなくて、よみがえって今も生きているんです。なのに暗い顔つきをするわけです。罪がすべて赦されているのに、なのに暗い顔つきをするわけです。もう永遠の滅びから永遠の命に至って、もう地獄に行かないで天国に行くという道が開かれているのに、暗い顔つきをするわけです。何故かというのを忘れるからです。だから覚えなさいと。私たちが忘れることを私たちの造り主はよくご存知です。最初から見据えた上で、忘れっぽい私たちのために、情けない私たちのために、忘れるからこれを行いなさいと。本当はそんなことを命じられなくても喜んで記念すべきなんです。記念会なんかしなくたって絶対忘れない。でも忘れるから記念会が必要なんです。

で、これは過去だけじゃなくて、未来も見据えていきます。主は戻って来られる。その日まで、未来を見据えながら、いつ主が戻って来ても良いように教会に集まって聖餐式に与るわけです。で、その際には『主の死を告げ知らせる』と。これがミサの目的です。『ミサ』というのは“解散する”と。解散してどうするかというと、家に帰るんじゃなくて、その後『主の死を告げ知らせる』ために遣わされていくわけです。それが本来の『ミサ』の意味です。ミサという言葉はもともとラテン語から来ています。“解散”という意味だと言いましたが、そこから派生したのが“ミシヨナリー”、“宣教師”、“使わされる”ということです。あるいは“ミサイル”、これも飛ばしていくというイメージがあります。『主の死を告げ知らせる』ためにあなたは飛ばされていくわけです。派遣されていくわけです。宣教師として。

で、同時に現在も吟味するわけです。ここでよく誤解されるのが27節の『ふさわしくないままで』という言葉は、「私は先週こんなひどいことをしてしまったので聖餐式に与るには値しません。とんでもない罪を犯してしまいましたからとても聖餐式には与れません。」と言って遠慮してしまうこと、そういう意味じゃないです。この『ふさわしくない』と言うのは、“価値がない”という言葉から来ています。そもそも聖餐式に与るに値する人なんて存在しません。聖餐式に与れるだけのふさわしい人なんて世の中には一人も存在しません。その意味においてはカトリックは正しいんです。マフィアでも与れます。でも聖餐式に、聖体に与ったからといって自動的に罪が赦されるようなそんな話ではなくて、イエス・キリストがもう二千年前に十字架に掛かって死んで下さいましたから、そのことが本当に我が為であったと信じるならば、自分の罪がイエスをあんなひどい目に遭わせたんです。自分自身がイエスを鞭打ったんです。あのフラグラムという鞭の先が幾重にも分かれていて、その先には鋭い金属の破片、ガラスの破片、動物の骨の破片が仕込まれてるあんな鞭で何度となくイエスを鞭打ったのが、私たちであります。で、その鞭によって皮膚に食い込んで、その鞭が皮膚を切り裂き、筋肉を引き裂き、まさに内臓まで飛び出そうとする寸前まで私たちは打ったわけです。あちこちに肉片も飛び散ったわけです。その肉片がまさに聖餐式のパンそのものです。カトリックのように化体説を言っているのではありません。イエスの体がパンそのものだと言っているわけではありません。それを象徴しているということです。ですから、マジマジとパンを眺めて下さい。私の罪がイエスの体を引き裂いた。鞭打っている自分をイメージして頂きたいと思います。罪を犯す度に私たちはそのようなことをイメージすべきです。そんなことはとても私の主には出来ません。それが自然な思いです。だからクリスチャンは「罪を犯すな」と言われるんじゃなくて、「犯したくない」わけです。「とてもそんなことは主に対して出来ません。再び主イエス・キリストを辱めて、あんな十字架の上に磔はりつけにするなんてとても私には出来ません。」そう思って私たちは罪を避けるわけです。で、罪を犯してしまった者は、そう思って罪を即刻やめるわけです。悔い改めるわけです。改めて主の憐れみにすがっていくわけです。ですから、平気でまた罪を犯して、一週間毎に儀式に与ることで精算していくなんていうそんな考えには至らないわけです。本当にイエス・キリストの十字架の死が、自分の為だったということ

を理解している限りは、平然と公然と罪を犯すということは出来なくなるものであります。ですから、“ふさわしい”という人は一人もいないんですが、でもそのイエス・キリストの死が自分の罪を贖うには「十分じゃなかった、ふさわしくないものだ、価値がなかった」とみなす者は、聖餐式には与れませんし、与るべきではありません。『ふさわしくないままでパンを食べる』それは、ここに書かれている通り、『主のからだと血に対して罪を犯すことになります。』イエスの死は「無駄死にだった、犬死だった、何の意味もない価値のないものだった」というのがここでの意味です。そういう者は、イエスが十字架の上でなされたことを全く信じませんし、認めませんし、自分の為だったという価値あるものとしても認めていませんから、罪を犯すことになるわけです。当然と言えば当然です。私たちが聖餐式に与る時、その点を吟味すべきなんです。どれほど価値のあるものか。“自分を吟味する”と勘違いして、自分がふさわしいかどうかを考えるんじゃなくて、イエス・キリストの十字架の死がふさわしいかどうか、価値あるものかどうか、自分の罪を贖うには十分だったかどうかを吟味するということです。これを間違えては、聖餐式はただの儀式律法に成り下がります。中には、プロテスタントの教会の一部には、例えば「姦淫の罪を犯したら聖餐式には与れません。」と説くところもあります。性的な罪を犯した人は、もう教会の一番後ろに座らさらされて聖餐式は受けられません。とんでもない履き違いです。そういう罪人だからこそ聖餐式を受けるべきなんです。ただカトリックと違って、パンと杯を飲み食いするだけで罪赦されるというような、自動的に儀式がそれをするわけじゃありません。敢えて罪ある自分を招いて下さったその主イエス・キリストの憐れみと恵みに感謝して、真実に自分の罪を正直に告白をして、そして自分の罪はイエス・キリストによって確かに贖われた。イエスの死はその意味においてふさわしいものだった、十分価値のあるものだったと、有り難いなと思って、パンと杯に与る者。それが“ふさわしい”という人であります。自分の罪を認める人が、聖餐式に与るにはふさわしい人という言い方が出来るかと思います。まあ、『わたしを覚えて、これを行いなさい。』という命令は、悲しい命令だということを忘れてはいけません。「忘れてました」という人は、そのことも悔い改める必要があります。「忘れるべきじゃないのに、忘れちゃいました。」忘れて何をしたかという、自分のことばかり考えたわけです。イエスのことを忘れて、イエスとの食事なんて全く忘れてしまって、もう自分のことばかりです。自分の思いに耽^{かた}ってしまったわけです。自分の過去を振り返る。自分の未来を。そして自分の現在を。聖餐式は主を覚える時です。主が過去にして下さったことを覚える時です。あなたが過去にしたことを覚えるんじゃないです。あるいは人がしたことを覚えるんじゃないです。未来もそうです。老後の事とか、将来のこととか、来週とか、来月とか、来年とか、自分の将来・未来を見据えることではありません。自分を見て一喜一憂するような、自分の足元ばかり見て、自分の内側ばかり見て、自分のことばかり考えることが聖餐式ではないわけです。ですから、「イエスをすっかり忘れて暗い顔つきで今日は教会に来てしまいました」それは罪です。悔い改めなければいけません。そのままでは聖餐式に与るべきではありません。その場で「忘れてました。主よ、ごめんなさい。自分のことしか考えていなかったんです。あなたに対して私は全く非礼なことをしてしまいました。折角あなたが招いて下さった食事だったのに、こんな暗い顔つきをして来てしまったなんて、ごめんなさい。」満面の笑みを浮かべて、エキサイティングしながら、ワクワクしながら、これ以上ないというもうまさに有頂天、天に昇るような気持ちで来なきゃいけないのに、重苦しさを持って、悩んだ顔つきで、何か枷^{かせ}を自分につけたような状態で、そんな姿を私たちはして来てるわけですが、それでもイエスはあなたを拒みません。ちゃんと教会に入れてくれるわけです。教会のドアが開いたのは奇跡です。イエス・キリストの教会ですから、鍵が開いても開かないことはあるあわけです。あなたはふさわしくないから入れません、いくらノックして叩こうとも。開いてるのはたまたま開いてたわけじゃありません。鍵を開けてくれた人がいたからじゃないです。入れたのはイエス・キリストがあなたを呼んで下さったからです。そんな顔つきでも、そんな態度でも、そんな面持ちでも。そしてもう一度“わたしを覚えるように”過去

から始まって、そして私たちの先にある未来。イエスと一つになれるんです。結婚出来るんです。天に入れて頂けるんです。その上で現在を、今の自分を吟味すべきです。ですから、イエスがどれほど価値のある方か。自分は価値なくたっていいんです。自分なんかどうだって良いんです。イエス・キリストが全てであれば、それで良いわけです。

で、それはどれほど頻繁に行なうかは私たちの手に委ねられています。この点については特別聖書では命じられていません。事例としては、初代教会は毎日行なっていた。あるいは一週間、日曜日ごとに行なっていた。ですから、最低でもその位の頻度は、日曜日行なうとか。私たちも礼拝、日曜日の礼拝は月に一回というふうにはしておりますけれども、ただ平日のバイブルスタディーの時も、水曜日とか金曜日にも行なっていますし、また皆さんには各自家庭でも聖餐式を是非行なって下さいというふうに勧めております。牧師が司式をしなければいけない、専売特許が牧師にあるわけではありません。イエス・キリストがホストであります。イエス・キリストが遠くに感じる。目の前にいるのに気付かずに暗い顔つきをしている。エマオの途上のあのクレオパ夫妻のような、二人の弟子のような体験はここにいる誰もがしているところだと思います。ですから私は特定の人を指差して責めているつもりはありません。私たちも教会に来る途上、クレオパ夫妻と全く同じように、全然イエスのことが見えないでいる。でもここに来て、御言葉を聴いているうちに、だんだん心が燃えてくるわけです。何かの変化を感じますね。そしてパン裂きの時には、ハッキリと目が開かれる。そういう瞬間が来るわけです。これからその時間を持ちたいと思えますけれども、金曜日の夜にはそれを行なっていますが、もう毎回毎回聖餐式を行ないたいという気持ちに駆られるのが自然であり、当然であります。

で、もう一つ聖餐式の儀式そのものじゃなくて、今度は食事に使われるアイテム、パンと杯。どうしてそれが使われるのか。他の物で代用しても構わないんじゃないかということも言えるかもしれませんが、聖書の時代のこれはイエスの時代の話で、ユダヤ人の過ぎ越しの食事がルーツですから、そこで使われていたものが儀式にも取り入れられた経緯でありますけれども。パンと杯がなければ、聖餐式は守り行なえないかということ、必ずしもそうではないと私は思っております。かつて日本の隠れキリシタンたちは、パンが使えなかったわけです。パンというのはキリシタンが聖餐式の時に使うものでしたから、パンを日本国内で作るということが禁じられていたわけです。江戸時代、キリシタンが弾圧されている時代は、パンを食べてもいけなかったんです。パンを食べるのはクリスチャンだったからです。聖餐式をするということがパンを食べることですから。パンを食べるということは、すなわちクリスチャンの証ということが、その時代の共通認識でしたから、御禁制だったわけです。でも、弾圧が終わってからパンが日本でも作られるようになりましたけれども、今私たちが日本でこうやってパンを食べるのは、キリシタンたちが迫害を受けながらも、またプロテスタントの宣教師たちもそれに続いてものともせず福音を宣べ伝えて、この日本が神様によって憐れみを受けたので、私たちはこうして今、信教の自由も得てパンも普通に食べられるわけです。キリシタンの時代を考えて頂くと、パンを食べられることもこれもすごい恵みです。で、話を戻したいと思いますが、そのパンはもともとは過ぎ越しの食事のパンですから、パン種が入っていない種無しパンだったわけです。パンを作る際に種を入れると発酵する時間が必要になりますから、時間がかかってしまいます。過ぎ越しの食事は慌てて食べたわけです。出エジプトする際に、発酵させるためにパンを寝かせている時間なんかないわけですから、スピーディーにパンを焼いて、食べて、さっさとエジプトを脱出するという、その時の食事ですから、急いで食べるというその意味合いからもパン種を入れなかったわけです。私たちもこの世という罪の世界を急いで出ていく必要があります。いつまでもダラダラと、パン種を入れて、発酵させて、のんびりとしている暇は、そんな余裕は持つてはいけません。サッサとエジプトを出て行く。慌てふためくように、罪の世界から離れていく必要があります。で、パン種は聖書では罪の象徴でもあります。小さな目に見えないようなそんな罪からパン全体が膨らんでしまうわけ

です。ちょっとした罪です。この程度は、ちっちゃい罪。でも侮ってはいけません。それが粉全体を膨らませるんです。あなたの人生をすべて蝕む。目に見えないようなちっちゃな罪でも例外ではありません。そのようなパン種を入れてはいけないということです。

で、杯については、これはぶどう酒・ワインですから発酵しているというふうに思うかもしれませんが、実際に最期の晩餐で用いられたその杯の“ぶどう酒”とみなされているもの、それが発酵したぶどうジュースだったかどうか、ワインだったかどうかは、問題があります。実際に干しぶどうを一晩水に浸けて、それから搾り取ったジュースを飲むということも昔はしておりました。あるいは発酵したものでも、ぶどう酒1に対して水が3、水割りワインと。ほとんど味の無いそれはどちらかというワインビネガーで割ったジュースみたいなそんな味だったと思います。清涼飲料のような、水が清潔ではないので、そのようなワインによって殺菌をするという、そういう効用もあって胃薬にも使われていた程ですから、これを何かお酒として嗜むとか、食前のワインのようにして飲むとか、そういう感覚で飲んだわけではないということも皆さんは聴いて知っていると思います。ぶどうが収穫できるその時期といのは、ストレートの搾りたてのジュース、それが最高の価値のあるものです。ワインの方が、ビンテージ物のワインの方が高価で価値があるというのは現代の話であって、その時代は冷蔵庫がないわけですから、発酵しないフレッシュなジュースが最高級の杯だったわけです。だから、ワインは安物です。逆にフレッシュなストレートのグレープジュースが最高級の飲み物だったわけです。で、それを使えるならばそれを使うべきであるということです。

で、他にも考えて頂きたいことが、パンとぶどう酒というのは、二千年前はイスラエルの地においては主食になっていたもの、日常の食べ物の代表格と言って良いと思います。日本人であれば、御飯と味噌汁みたいなそんなイメージで良いかと思います。もうパンとぶどう酒と言ったら、そういう普段の日常の食べ物。これが主食ですから、体を養って支えていくもの。御飯と味噌汁のような感覚で捉えて頂きたいと思います。それを私たちが聖餐式の中に見出したいと思います。イエス・キリストというお方が、まさに私たちの日常の常用食のようなお方です。この方が私たちを生かす。この方が私たちを支えるという、そういう存在だということを感じる時でもあります。

聖書の中で、人間と動物の食べ物について触れている箇所がありますがけれども、基本的には“種”それは穀物全般です。そしてもう一つは“実”です。これは果物全般です。果実。そして草。そして肉、これはいろんな獣、鳥、昆虫、魚も含めてこれは全て肉にあたります。この4種類が人間と動物の食べ物として聖書の中に挙げられております。で、最初の人アダムとエバが創造された時、罪を犯す前の、墮落前の時、彼らの食べ物は何だったのかというと、**創世記 1 : 29** に記されています。罪を犯す前の、墮落前の人類の食べ物。それは4種類あったのではありません。『**神は仰せられた。「見よ。わたしは、全地の上であって、種を持つすべての草と、種を持って実を結ぶすべての木をあなたがたに与える。それがあなたがたの食物となる。」**』これを言い換えれば、人類の食べ物は“種”と“実”であったと。で続く**30節**には『**また、地のすべての獣、空のすべての鳥、地をほうすべてのもので、いのちの息のあるもののために、食物として、すべての緑の草を与える。」**そのようになった。』動物用の食べ物は“草”だったと。しかし、創世記3章、罪を犯して墮落したあとの人間の食べ物は何になるかということ**創世記 3 : 18** 『**土地は、あなたのために、いばらとあざみを生えさせ、あなたは、野の草を食べなければならない。**』要するに野菜を食べなければいけないと。現代は野菜を食べることがむしろ健康的で理想的だと。ベジタリアンとか言います。でも実はベジタリアンというのは、罪人の食べ物。野菜を食べなければいけなくなりました。これは罪の結果ということです。ですから野菜を食べる度に思い起こしてください。罪の結果なんだと。野菜が美味しいと思うのは神の憐れみですけれども。で、その後ノアの大洪水があります。**創世記 9 : 3** を見て頂きたいと思います。『**生きて動いているものはみな、あなたがたの食物である。緑の草と同じように、すべ**

てのものをあなたがたに与えた。』それが今の、現在の私たちの口にする物です。“草”と共に“肉”が人類の食べ物とされた。これはノアの大洪水によって地球の環境が決定的に変化したわけです。それ以前は、“草”を食べていたわけです。野菜。果物もあったわけですが、穀物と実・果物、それが最初の墮落前の人間の食べ物。でも墮落してからそれに草を加えなければ人間は生命を維持できなくなったわけです。で、ノアの大洪水以降、それに今度は肉を加えなければ生きていけなくなったわけです。でも、原点は“種”すなわち穀物と“実”果物です。で、それが聖餐式のパンと杯・ぶどう酒です。パンは麦です。それは“種”穀物です。で、ぶどう酒は葡萄^{ぶどう}から来ていますから、これは果物“実”です。“種”と“実”これが聖餐式のアイテムです。罪を犯す前の人類の食べ物の象徴です。ですから、これを口にする時私たちは思い起こすべきです。私たちは罪赦されて、アダムとエバと同じように、もうこれだけで十分です。このパンと杯、この二つで十分。これはイエス・キリストを表していますから、イエス・キリストで私たちは十分です。そのことの確認が出来るわけです。もう肉だとか野菜は必要ありませんということです。かと言って、これを皆さんの生活の中に取り入れて、「もう自分は今後野菜は一切食べません」とか、「肉を食べません」とか、そういった極端に走らないで頂きたいと思います。残念なことに、私たちの肉体は罪の性質を抱えたままですから、この4種類の食べ物を必要とするわけです。食べる、食べないは皆さんの自由ですけれども、ただ聖餐式においては、これ以外の物は食べてはいけないうわけです。パンと杯です。ですから、パンと杯が手に入らなければ、種と実を意識して頂ければと思います。勿論種無しパンを毎回焼いたりするのは大変だという人もあると思いますから、その辺のお店で売っている種が入っているパン・食パンとか菓子パンでも代用しても勿論構わないと思います。レーズン入りのパンだったら一気にまかなえると思うかもしれませんが、いずれにしても意味するところが大事だということです。で、そういった目に見えるものがないと出来ないということでも勿論ないと思います。キリストを覚えることが趣旨ですから。そのために助けになるものが目に見える象徴物に過ぎないということ覚えて下さい。その象徴物がそのままイエス・キリストになっちゃうとか、そういう化体説はカトリックの考えですが、それは非聖書的だと思います。そこにイエスが共在して下さる、共にいて下さるとか、そのパンを食事する時だけ天からイエスが下りてきてくれるとか、いろんな考えがありますが、キリストを覚えるというのが趣旨だということです。ただ過ぎ越しの食事というその食事は、ほふられた子羊の肉も食べますし、今ではユダヤ人たちは過ぎ越しの食事は鶏の肉も食べますけれども、種無しパンも食べますし、また野菜も苦菜として食べたりもします。でも、これは聖餐式とは別の食事になりますので、過ぎ越しの食事という形では、この種と実以外の食べ物も口にするわけです。で、これを毎回毎回なるべく頻度をもって行なうのが理想だと言いましたので、MGFとしてもバイブルスタディーは水曜日、そして金曜日の夜、平日2回行なっています。で、日曜日は今は月1回第一日曜日に行なっておりますけれども、また日曜日の方も頻度を増やすことが出来ればと思っております。ただそれを備えるためには、種無しパンを焼いたりとか、あるいはぶどうジュースを備えていく必要がありますから、それも経済的にも負担のかかるものですから、私たちの出来る範囲でそれらを用意して、頻度が増やせるようであれば増やすことが出来るのが理想だということでもあります。

で、これでそろそろ終わりにしたいと思っておりますけれども、聖餐式はこの教会では、イエス・キリストを主と信じる者には全員開かれております。一部の教会では、洗礼を受けてないと、バプテスマを受けてないと聖餐式には与れないという教会もあります。で、勿論洗礼式に限って言うと、「うちの教団のスタイルで洗礼を受けないと聖餐式は受けられない」とか、あるいは「正式にその教団の会員にならなければ聖餐式は受けられない」とか、そういう制約があるところがあります。でもこの教会ではそういう制約は特別聖書に記されていない以上、制約としては設けてはおりません。

で、中には聖餐式の論争として“フリー聖餐”というような言葉がありますが、これは特に日本基督教

団の中でトラブルとなって使われている言葉ですけれども、“フリー聖餐”というのは、聖餐式はもうフリー・自由で、クリスチャンだろうとノンクリスチャンだろうと誰でも与れますと。そういう“フリー聖餐”または“フリーコミュニオン”と言います。で、それに対して“クローズドコミュニオン”。クローズしている、閉じられたコミュニオン。これは会員のみが受けられるという聖餐式の参加のあり方。あるいはもう一つは”オープンコミュニオン“。オープン、これは洗礼を受けたクリスチャンならば誰でも受けられるという聖餐式。そういういろんなコミュニオン、聖餐のスタイルがあるということを知って下さい。”フリーコミュニオン“という呼び名は最近では使われなくなりましたが、フルオープンコミュニオン“という言い方をして、クリスチャン、ノンクリスチャンにかかわらず、教会に来たら誰でも希望者には聖餐式が受けられますよという考えです。で、この教会はそのどれにも当てはまりません。クローズドコミュニオンは教会員のみ。で、オープンコミュニオンは洗礼を受けたクリスチャンのみ。で、フルオープン若しくはフリーコミュニオン、これはノンクリスチャンも受けられますと。この教会はそのどれにも当てはまりません。洗礼を受けていなくても、イエス・キリストを信じている者ならば、聖餐式は受けられますけれども、ただイエスを信じていない者が聖餐式に与っても何の意味も無いです。イエスの死が自分にとってふさわしくない、価値があるということが全く分かっていないならば、却ってそれは問題となります。ですから、ノンクリスチャンには勧めませんし、ただのパン、小さなパン・パン切れとぶどうジュースの試飲をするようなものですから、そんなのはスーパーの地下でやってもらいたいということなので、ここではそんなことはいたしません。ただ、そういういろんなスタイルのコミュニオンがあるということを知って頂いて、ここで通用していることは他で通用しているわけじゃないです。他で通用していることが、ここで通用するわけでもありません。私たちはあくまで聖書に何と書かれているのか、聖書に書かれていないことは避けて、書かれていない部分についてはある程度の自由が勿論私たちには与えられてはいますけれども、だからといって好き勝手にやっていいものでもありませんので、頻度は指定されていない以上、毎日でも良いと思います。一年に1回では少なすぎると思いますし、月1回でも少なすぎると私は思っております。毎日出来たら幸いですし、毎日でもしかも朝と夜する人もあります。私はかつてバイブルカレッジにいた頃は、そういうふうに住生活しておりました。また、クリスチャンであれば誰でも受けられますから、聖餐式は他教会の人でも歓迎しますし、まだ洗礼を受けていないけれども今イエス・キリストを信じましたという人は、もう早速聖餐式に与ることは OK と私は考えていますので。他の教会ではそれは必ずしも正論ではないと、しかもそれを正教師と呼ばれる牧師が司式をしなければいけないということで、牧師がいなければ聖餐式は出来ませんという教会がほとんどであります。それはイエスの御心ではないと私は聖書から判断していますので、皆さんは神の家族である以上イエスがホストとして自由にどこでも牧師がいようとまいと是非やって頂きたい。家だろうと、施設だろうと、病院だろうと、野外だろうと、勿論教会の中では出来る限り皆で集まってやるべきですけれども、そういう自由なところは神様が私たちに自由に出来るように許して下さっているところですが。でも、ちゃんと意味というものを聖書からしっかり踏まえた上で、押さえた上で行なわなければ、そうした頻度をもって、皆んなで集まって、いくら儀式を行なっても、そこにはそれほど価値は無いということです。

で、最後にジャン・カルヴァンという人が『**聖餐式は私たちの信仰の弱さを補うために備えられたものである。**』というふうに言ったということなんですが、本当に私たちは弱い者です。さっきも言った通り忘れやすい者です。自分の命の恩人のことを忘れるなんて、とんでもない話です。自分を産んでくれた親のことを忘れるなんて、まず無いと思います。でもイエスは私たちを十字架の上で産んで下さったんです。最後のアダムとして、最初のアダムの脇腹からエバが生まれたように、最後のアダム、イエス・キリストの脇腹から、あの十字架の上で血と水が分かれ出たわけです。まさに出産と同じです。そこから教会・花嫁が生まれた、私たちが生まれたわけです。イエスは命の恩人だけでなく、私たちの生みの親でもある

わけです。で、夫でもあるわけです。アダムとエバと同じ関係です。で、その私たちは、アダムとエバが食べた“種”と“実”を食べる者として、聖餐式の食卓に招かれているわけです。なのに、それを全部忘れて、自分のことばかり、または聖餐式以外の食事のことばかり、「今晚食事どうしよう」とか。「来月からどうやって食っていこうか」とか。「老後はどうやって食っていこう」とか。「このままでは蓄えがどの」とか。そんなことばかり考えて、心配して、「自分がこのままではもう病気だから」とか、「こんな障害があったら」とか、「こんな経済状態では」とか、「こんな仕事では。」

まあいろんなことを悩んで、心配して、もう全部その時はイエス・キリストを忘れてしまっているわけです。弱者です。でも聖餐式はジャン・カルヴァンが言った通り、私たちのその信仰の弱さを補うためにも備えられています。聖餐式の度にイエスを思い起こして下さい。忘れていたイエスを思い出して下さい。御言葉を聴きながら、こころが燃える体験を必要としています。そうじゃなければ私たちも希望もなくあてもなく、ただエマオの途上を暗い顔つきをして歩くような者に成り下がってしまいます。でもそんな私たちでもイエスは受け入れて下さり、一緒に宿をとって、一緒に食事をして、パンを裂いて、私たちの目を開いて下さるお方です。そしたら、私たちもあの二人の弟子、クレオパ夫妻のように自分が体験したことを知らせに行くわけです。「私たちは主に会った。パンを裂かれた時、目が開かれて、それが主と分かりました」と。「復活のキリストに出会ったんです。一緒に歩いたんです。そのお方から聖書を学んだんです」とそのことを伝えるようになります。主が来られるその日まで伝えるようになります。では、今日はこれで終わりたいと思います。